

一〇〇〇坪とされたので、建築委員会は従来の計画案を白紙に戻し、さきの「附属図書館建築の基本方針」をもとにした新たな計画を作成し、設計者に伝えました。以後、設計者から提示された平面図には何度も修正が加えられ、一九六三年一二月に工事が着手されました。

二 豊田講堂と榎文彦

◆豊田講堂の概要

豊田講堂は、一九六二（昭和三七）年度日本建築学会賞を受賞しました。『建築雑誌』に掲載された受賞推薦理由には次のように書いてあります。

この講堂は新しく発展した名古屋市の郊外に建設された名古屋大学の広い校内の中心に建てられたもので、総面積六二七〇平方メートルの内部には一六〇〇を収容する講堂のほかに、大学総長室、会議室等を含み、さらに入口の両翼に広い空間を設けて、学生の集いに便するなど、大学の中心建築としての多目的な機能をよく解決している。その外観は構

造体と材料感を力強く表現し、その内部は音響効果と造形的空間をたくみに構成しているが、特に注目される点は学園としての環境計画である。一二〇メートルに及ぶ広い前庭には八〇メートル角の広場を設けて学生のための野外集会に当て、さらにその空間は建築内のピロツテイーに接続して、建築内部を経て背面の岡にまで延長しているために、建築の内外に豊かな環境美が発揮されている。同時に建築の設計に示されている新鮮な意匠感覚は学生たちにいっきとした共感を与えるであろう。この意味において、この講堂は建築の機能と共に学園の環境計画に効果ある設計を発揮したものといい得る。よって、この作品に対し日本建築学会賞を贈るものである。

（『建築雑誌』一九六三年八月号）

この文章を読むと、ひとつの建物としての評価はもちろんのことですが、外部空間をふくめた「環境美」が積極的に評価されたことが読み取れます。豊田講堂は、細い角柱と建物外周に設けられた耐震壁によって支えられた大屋根によって生み出された巨大な架構のなかに、講堂本体・会議室等の機能に応じた諸空間が収められています。一方、前庭と呼ばれる外部空間は「野外演壇」や大階段を介して「裏庭」へと続いていく連続した床面として捉えることができるとでしょう。床面から垂直に立ち上がった時計台は、大屋根を貫通して立体的な造形によって

巨大な架構と床面を結びつけています。ここでは、「架構」・「造園」・「空間構成」・「素材」という四つの観点から「学園としての環境計画」の原点を探ってみましょう。また、豊田講堂には、現在三種類の設計図が残されています。これらの豊田講堂の設計図として残されている三種類の図面を見比べてその設計過程について検討してみます。

◆「メガストラクチュア」としての架構

グリーンベルトの幅一杯に建てられている豊田講堂は、七九・八メートル×三六・〇メートルの大屋根がおおよそ五〇センチメートル×八〇センチメートルの偏平した角柱と、建物外周に設けられたコ型またはH型の平面形をした耐震壁によって支えられています。地震力の対処から要求される構造壁をバットレス（控え壁）として建物外部へ放り出す代わりに、垂直荷重を支持する柱は思い切り細くなっています。鉄筋コンクリートによる巨大な構造物なのですが、構造計画を工夫することによって成し得た列柱の細さは、この架構をとっても軽快なものにしています。ピロティと呼ばれるこの列柱の下に立って初めて感じる空間の巨大さは、レイナー・バンナムが「現代のサブライム（崇高性）」と呼ぶ「メガストラクチュア」に他なりません。豊田講堂は日本における「メガストラクチュア」を具現した最初期のものとして評価できますし、それまで日本において支配的であった鉄筋コンクリート造の架構表現とはかなり性格の

異ったものです。

では、豊田講堂における列柱と大屋根からなる巨大な架構は一体何を意味するのでしょうか。槇はこの建物のことを「門としての建物」といういい方をしています。名古屋大学には明確な正門が存在しません。門扉のないキャンパスにおける大学の「門」、それは東山キャンパスに槇が与えたひとつの準拠枠だったのではないのでしょうか。豊田講堂の竣工写真（口絵）をみると、「茫漠たる」風景が広がるなかに忽然と建物が建てられていることがみて取れます。豊田講堂の列柱と大屋根からなる巨大な架構は、グリーンベルトが形成する軸を受けとめる建物という意味において、正しく「メガストラクチュア」としての「門」です。しかしながら設計者である槇自身にとつても、同様に重要な準拠枠となつたのではないのでしょうか。後述するように「相対性」を重んじる槇にとつて、「メガストラクチュア」という所与の準拠枠が必要であつたと思われるのです。丘陵の地形と、グリーンベルトが形成する軸という土木的なスケールの他には何の手掛かりもない敷地において、様々な建築的なスケールの空間を収めるためには、両者を調停するスケールを備えた空間が必要であつたに違いありません。大屋根と列柱による巨大な架構が生み出す空間の造形は、見事にこのスケールの問題を解決しているのです。

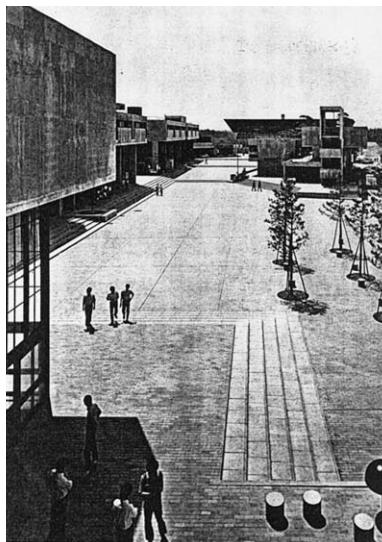
◆ 「微地形」の操作による造園

次に、豊田講堂の床面の造形について考えてみましょう。槇は豊田講堂の設計主旨に次のように書いています。

将来予想される学園の軸としてつらぬく一二〇mの並木道路の末端に位置するところに、大きな石の広場をもうけ、それにまたがる仁王門のような建物が前方の茫漠たる空間と対し、そこで一応区切りがつけられる。さらに階段と、高いピロティを通して後方の東山の丘陵のもつ静かな雰囲気へと空間が導かれていく。

（『新建築』一九六〇年八月号）

土地の起伏という観点からみた豊田講堂の配置は、なだらかな傾斜をもった斜面の終点であり、勾配が急に大きくなる変極点となる場所に建てられているといえます。竣工当時にピロティ下の階段や前庭から、戦災復興計画にもとづいて発展していく名古屋の街を望む風景の素晴らしさは、今も想像に難くありません。反対に四谷通から豊田講堂を眺めた時には、前庭のパラペットが生み出す水平線は、豊田講堂の基壇となっています。前庭が「五〇〇〇人の集会のために」設けられた動的な広場となっているのに対して、講堂の脇を通って自然にたどりつ



立正大学熊谷校舎総合計画
 (『現代日本建築家全集19』)



大高正人、坂出人工土地
 (『新建築』、1968年3月号)

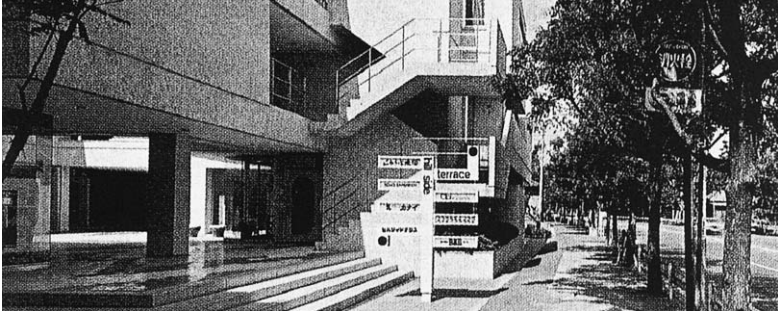
くところにあるロビーと裏庭は、丘陵の斜面を背景とした静的な空間がつくられています。この動と静という二項対立による造園を結び付けているのがホールの両側にあるピロティです。前庭からピロティを抜けて裏庭に連続する動線は、のちに槇が提示する「奥」という概念の萌芽として読み取れるのではないのでしょうか。

槇は一九六〇年代に大高正人と「人工土地」に関する数編の論文を書きました。しかしながら、槇の「人工土地」に関する関心は、大高の「坂出人工土地（一九六六〜七四年）」に代表される当時ほかの多くの建築家を取り組んだ、さまざまな機能を大規模に積層させるやり方とは

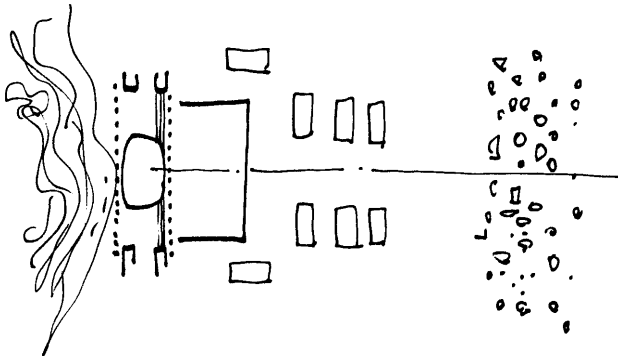
少々異った方向へ向かっていきます。彼はその後、地理学で用いられる「微地形」という言葉を援用しながら、設計の与条件となる周辺環境をほんのわずかな大地の起伏として形態に還元しようとしています。言い換えれば、建物が地面に接地するレベルのわずかな変化を再編しようとしているともいえるでしょう。「立正大学熊谷校舍総合計画（一九六七～六八年）」や「代官山集合住居計画（一九六九～九九年）」に顕著にみられるこうした床面の造形は、豊田講堂においてその原形がみられると思われるのです。

◆アシンメトリーの空間構成

ところで配置だけを見れば、豊田講堂は大学整備の骨格としてつくられたグリーンベルトの軸上に建てられており、きわめてモニュメンタルな建物です。スケッチをみると確かにシンメトリー（左右対称）な図が描かれています（次頁）。しかしながら、講堂本体はグリーンベルトの中心軸よりもやや北側の場所に据えられていますし、時計台も中心軸から外れた南側に偏った位置に建てられている上に、総長室・貴賓室・会議室などの諸室が大屋根から吊られるように設置され、全体としてアシンメトリー（左右非対称）な立面構成をしています。受験雑誌でお馴染みの東京大学の安田講堂や教養部時計台をはじめとして、中央に時計台を頂いたシンメトリーな空間構成を持つ建物は戦前の帝国大学キャンパスのシンボルでした。同時に近代



代官山集合住宅計画第Ⅱ期（『新建築』、1973年10月号）



豊田講堂エスキース（『現代日本建築家全集19』）

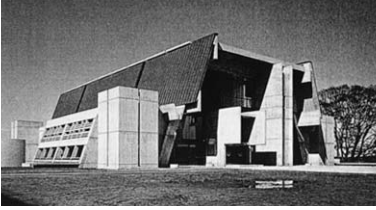
日本がめざした中央集権的な国家システムを具現したものであつたといわれています。これらの戦前の事例に対して名古屋大学の豊田講堂は、グリーンベルトという大きなスケールでは軸を受けてシンメトリーに建られています。実際の機能に対応する小さなスケールではアシンメトリーな空間構成が取られているとみることができるのです。つまりこのようなアシンメトリーな空間構成は、前述した「メガストラクチャー」としての架構がシンメトリーな軸

に取って代わり、全体の秩序を保証しているために成立し得たといえるでしょう。こうしたアシンメトリーの空間構成には、正門をもたない大学という名古屋大学のキャンパス理念によく応答していると思われれます。

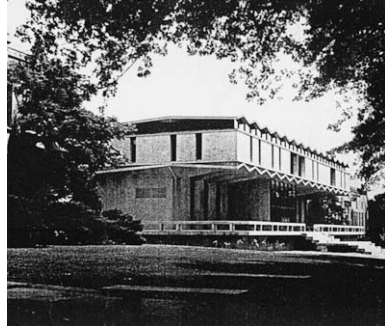
楨は一九六五年に設計事務所を始める前に、名古屋大学豊田講堂・ワシントン大学スタイルンバーグホール（次頁）・千葉大学記念講堂（次頁）という三つの建物を設計していました。これらに共通する点は、いずれも「人工土地」の上でアシンメトリーな位置にエントランスが設けられた建物が建てられていることです。とくに名古屋大学と千葉大学の講堂では、ホールが「人工土地」である前庭に対してアシンメトリーに配置されており、床石のパターン割についても酷似しています（次頁）。両者は立体的には全く異なる空間ですが、千葉大学の平面形は名古屋大学の列柱と大屋根からなる架構を取り除いた状態として捉えることができるのではないのでしょうか。楨は豊田講堂の竣工後に「講堂本体さえも）外部と隔絶されているところに不満が残った」といつていますが、この平面形の相似を考えれば大いにうなずけます。

◆コンクリートという素材

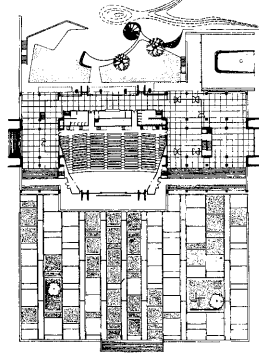
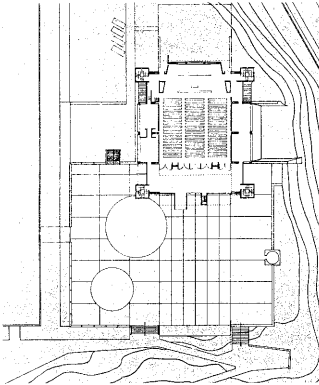
今度は豊田講堂に用いられている素材についてみましょう。基本的には構造体である打ち出しコンクリートが素地のままむき出しになっています。バンナムは、一九五〇年代から六



千葉大学記念講堂（『新建築』、1964年12月号）



ワシントン大学スタインバーグホール
(Architectural Forum, 1961/8)



豊田講堂と千葉大学記念講堂の配置図比較、右が豊田講堂、左が千葉大学記念講堂（『現代日本建築家全集19』）

○年代にかけて世界中で展開されたこうしたコンクリートによる荒々しい表現を「ニュー・ブルータリズム」と呼びました。一方、一九五〇年代の我が国の建築界は、日本建築の伝統をいかにして現代建築として反映することができるかという議論、いわゆる「伝統論争」がとても盛んでした。榎の東京大学時代の恩師である丹下健三による「香川県庁舎（一九五八年、次頁）」に代表されるように、打ち放しコンクリートによって日本建築の伝統を表現する「日本的コンクリート打ち放し」という手法が席捲せつけんしていました。ところが榎が「二五才から三五才までの一〇年間の間に日本を距離をもつて見たというその経験」は、こうした「伝統論争」とは無縁の立場に彼を至らしめることになったのです。豊田講堂の打ち放しコンクリートは、榎が「日本的コンクリート打ち放し」に終止符を打ち、「インターナショナルなコンクリート打ち放し」へ移行させようとする道標であり、榎文彦というひとりの建築家の内部に起った両者の葛藤であったと考えられるのです。

豊田講堂はコンクリート打ち放しの灰色の建物という印象が強いと思われませんが、決してそのようなことはありません。豊田講堂に代表されるこの時期の打ち放しコンクリートをもう少しよく眺めてみると、現代の平滑な表面と少し違うことに気づくと思います。一〇センチメートル程度の幅をもつた木の肌目が淡くコンクリートの表面にみて取れます。それはコンクリートを打ち込む際につくられる型枠の痕跡ですが、この木製型枠の跡は現代建築の打ち放しコン



丹下健三、香川県庁舎（『新建築』、1959年1月号）

の中にそれぞれ矩形の色面を構成するように埋め込まれています。これらは一九五〇年代の建物に顕著なディテールですが、ここではそれらの素材が、コンクリートという素材に対してバランスよく用いられているといえます。

また素材という視点からみても、槇によつて同時期に設計された千葉大学や立正大学などの講堂建物よりもきめ細かい設計がなされているといわれています。竣工当時の建築雑誌には、豊田講堂の設計者は「設計顧問 槇文彦、設計施工 竹中組」として紹介されています。これらのディテールが竹中組（現、竹中工務店）の確かな施工技術に裏打ちされていることはいう

クリートとは異なる独特のスケール感と、型枠職人の確かな手の跡を感じさせます。また講堂本体と会議室部分にはヘキサイトが白塗りされており、架構とは異なる表現がなされています。その結果、架構のなかに講堂本体と会議室部分が構造体から浮んでいるようにみえるのです。さらに床には、玉砂利洗い出しという手法によつて黒・赤・緑・白色をした小石が、コンクリート

までもありません。加えて当初予算の倍額である二億円というトヨタ自動車工業株式会社の潤沢な寄付金によつて高い完成度を誇る建物となったといえましょう。

◆設計過程

さて、豊田講堂はどのように設計が進められてきたのでしょうか。豊田講堂には、現在三種類の設計図が残されています（口絵）。一つは、大学施設部に残されていた最初期案と思われる図面（正確な時期については不明、図A）です。残りの二つは雑誌上に発表されたもので、計画案として『新建築』一九五九年七月号に掲載された図面（図B）と、同じく『新建築』一九六〇年八月号に掲載された完成図面（図C）です。これらの三種類の図面を比べると、まず架構については図Aでは柱間寸法が東西南北両方向において均等に割り付けられていますが、ほかの二つでは南北外周の耐震壁形状がコの字型に変更され、東西方向の柱間が大小二つの寸法からなっていることがわかります。図Aにみられるように均等に割り付けられた各柱間には、それぞれ小さなトップライトを備えたドームが架けられており、現況のコンクリートシェル構造によるひと続きの大屋根とは全く異つた様相を呈しています。造園については三枚とも異つていますが、いずれもアシンメトリカルな設計となっており、大きな変更点はありません。また図Aにおいては時計台が建物外部である裏庭に設計されていますが、この位置に建てられた

時計台は、人目に付きにくいものになっていたと考えられます。また同じく図Aにおいては講堂本体が架構から突出しており、前庭の演台に大きなプロセニウムが設けられていることが読み取れ、野外劇場としての前庭に対するイメージが当初からあつたことがうかがえます。

◆ 建築家としての初仕事

ところで、豊田講堂の竣工式の写真を眺めると、勝沼総長、石田退三トヨタ自動車工業(株)社長らに並んで一人の青年が座しています(二九頁)。豊田講堂の設計者である槇文彦です。当時、若干三三歳でした。豊田講堂は彼にとつての処女作となりました。ここでは、その後日本を代表する建築家となつた槇文彦について若干の紹介を行い、彼の初期作品における豊田講堂の位置づけについて検討を加えることにします。

◆ 「インターナショナルな感性」

古川図書館の設計者である谷口吉郎が東京大学工学部建築学科を卒業した一九二八年、槇は東京の山の手に生まれました。槇は、東京大学の卒業に際しては辰野賞を受け、同大学院の丹下健三研究室に進学しました。ほどなくして彼はアメリカへ留学し、クランブルック美術学院を経てハーバード大学大学院にて建築学修士を取得し、ひとりの建築家としての道を歩み始め

榎文彦 年譜

年	出 来 事
1928 (S. 3)	東京生まれ、慶応義塾大学普通部・工学部予科を経て
1952 (S. 27)	東京大学工学部建築学科卒業（辰野賞） 同大学大学院丹下健三研究室を経て
1953 (S. 28)	クランプルック美術学院修了（建築学修士）
1954 (S. 29)	ハーバード大学大学院修了（建築学修士）
1954-56 (S.29-31)	S O M建築事務所
1956-62 (S.31-37)	ワシントン大学建築学部準教授
1962-65 (S.37-40)	ハーバード大学大学院デザイン学部準教授
1965- (S.40-)	榎総合計画事務所
1979-89 (S.54-64)	東京大学工学部建築学科教授

ました。

一九五八年の夏、ワシントン大学準教授の職にあった榎は、若手芸術家をサポートするグラハム財団のフェローシップに選ばれます。欧州・中近東・東南アジアの建築視察旅行にその後の二年間を費やしました。先述した名古屋大学豊田講堂・ワシントン大学スタインバークホール、千葉大学記念講堂という三つの作品は、この世界旅行の最中に設計されました。

榎の母方の祖父は、日本の代表的な建設会社のひとつである竹中組社長であった竹中藤右衛門です。トヨタ自動車（株）は、名古屋大学に講堂を寄付するにあたって建設会社として竹中組を指名しました。潤沢な奨学金をもとに世界旅行を続ける榎が「ブラブラ遊んでいたように見えた」竹中藤右衛門は、豊田講堂の設計を任せることにしました。その結果、彼は「その後二年間は旅行の合間に設計をし、工事も監理もする」ことになったといえます。したがって豊田講堂はこの世界旅行の道中に設計されたものであり、正しく「インターナショナルな感性



豊田講堂竣工式写真（大学史資料室所蔵）、右端が槇文彦

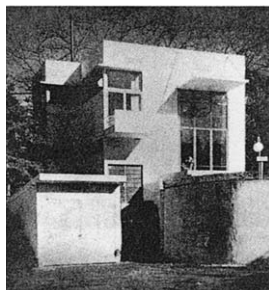
（原広司）」にもとづいた空間が形成されたといえます。槇はインドで現代建築の巨匠の一人であるル・コルビュジエに豊田講堂の設計図面をみせる機会を得ました。槇はその時のことを次のように述懐しています。

かつてシャンディガールを訪れた時、たまたま滞在中だったコルビュジエが当時、名古屋の「豊田記念講堂」の設計中の図面を持って歩いていた私に、わざわざ親切に批評をしてくれた。その時は、耐震壁に埋没した柱をさして「できるだけ柱を自由にしてあげなさい」といったのを、いまでもよく覚えている。

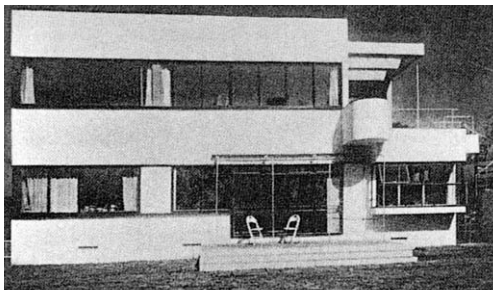
（『新建築』一九七八年四月号）

◆グロピウスとの出会い

槇が入学したハーバード大学建築学部は、バウハウスを起こしたワルター・グロピウスがナチス・ドイツによる迫害を逃れてアメリカにたどり着いた先でした。槇が留学した時期には、グロピウス本人はすでに引退していましたが、彼の影響がとても濃厚な教育がなされており、その独特の気風は「ハーバード・スクール」と呼ばれていました。槇はグロピウスの自邸をたびたび訪れて私淑したといえます。しかしながら、槇とグロピウスとの出会いは、その時が初めてではありませんでした。少年時代に近所でみた土浦亀城かめぎという建築家が建てた自邸（一九三五年、次頁）と、谷口吉郎が設計した佐々木邸（一九三三年、図）は、グロピウスの影響を大きく受けた住宅でした。槇が「僥倖」だったと後述しているこの白い瀟洒しょうしやな住宅に対する原体験は、グロピウスの「ハーバード・スクール」を経由して、槇の意匠上の骨格を形成したといえます。槇から見ると、一代前の建築家達は、伝統的な日本建築の中に「モダニズム」の精神を見出し、日本建築を西洋建築社会に翻訳することに腐心しました。その典型が丹下健三の第二次世界大戦後のC I A Mシエム（近代建築国際会議）を通じて行った活動であり、前述した「伝統論争」の原動力のひとつとなったと考えられます。これに対して槇は、「モダニズム」を日本建築の伝統と切り離してみることでできた戦後初めての建築家であったといえるでしょうし、この意味において豊田講堂が日本の現代建築に与えた影響はとても大きかったと考えられます。



土浦亀城、土浦亀城自邸
 (『新建築』、1935年3月)



谷口吉郎、佐々木邸 (『国際建築』、1933年11月)

◆ 「相対性の建築」

では、「ハーバード・スクール」において槇が学んだことを考えながら、彼の建築空間の特質について検討してみましよう。槇の言説によれば、「スケール」ということを(師である)ホセ・ルイ・セルトから、「場所性」ということを(友人である)アルド・ファン・アイクから学んだ」といつています。「スケール」にしても「場所性」にしても相対的な関係のうちに成立するものです。彼は決して自らの主張を声高に披瀝するようなタイプの建築家ではありません。むしろ控えめなほどですが、この控えめな立ち居振舞いが建築を取り巻く諸条件に対して、極めて客観的な視点を与えているといえます。槇は設計をする際に、建物を自己目的に取り扱うことなく、周辺環境の中で(多くの場合それは「都市」という問題設定に還元される)ことが多いのですが)、公共の場所を形成する要素として取り扱います。すなわち彼の設計は、与条件や自らが設定した条件の本質を的確に捉え、それらを熟慮した上での回答であり、



集合体における三つの典型、右から順にコンポジショナル・フォーム、メガ・フォーム、グループ・フォーム（『現代日本建築家全集19』）

周辺環境との折り合いの結果にほかならないのです。

一九六〇年、東京で開かれた世界デザイン会議のために、「メタボリズム・グループ」の一員として大高正人ともに「群造形」という建築概念を提示しました。さらに槇は豊田講堂が竣工してから四年後の一九六四年、一冊の著書をワシントン大学から出版しました。この著書が世界の建築家に与えた影響はとて大きく、バンハムによる『メガストラクチュア』の補遺にも、この論文が収録されています。「Investigations in Collective Form」（『集合体に関する研究』）と題された赤い表紙の小冊子において、槇はさまざまな機能が複合する巨大構築物に見出される形態上の論理を指摘しており、その際「単体として完結した建物」ではなく形態相互の相関関係に着目しています。それは、建築空間としては建物の集合に際して公共的な用途をもった内部でも外部でもない半外部空間という「どこでもない空間」の造形に他ならず、それが槇の造形上の発見だったのでないでしょうか。この集合に際する要素間の形態上の相対的な関係が、上述の「場所性」と「スケール」という問題として帰着していると考えられるのです。しかも、このような槇の

「相対性の建築」こそが、建築文化における西洋と日本という図式を相対化させることにつながったと考えられましょう。

三 古川図書館と谷口吉郎

◆古川図書館のデザイン

ここでは、古川図書館のデザインを具体的に検討して、その特質について考えていきたいと思います。

まず古川図書館が、雑誌『新建築』に発表された際の設計要旨をみてみます。

名古屋の実業家古川為三郎および志ま夫人によって、寄贈された名古屋大学の図書館は、戦後千種区に移転した広大な同大学の中央広場に建てられた。この図書館は従来の大学図書館が書籍の保存と閲覧とを主な目的としていたのたいして、さらに新しい図書館の要求に応じて、文献のサービスと総合研究の便宜をはかるために、館内に複写施設と共同研